
マジシャンズ・ブレイド

志貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジシャンズ・ブレイド

【Z-コード】

Z7262C

【作者名】

志貴

【あらすじ】

時には森羅万象をも操ることができると言われる神秘。異能ともいえる力を駆使し、異形の怪物や時には人を相手に戦う、男より漢な捺揮と非常識なひねくれ者の鶯真のバトルストーリー。

「ガウオッ！」

それは咆哮を上げ、大気を揺るがし。オレの鼓膜を痛いほど震わす。その後に起こる静寂と共に訪れる暴炎。

「おそれくは人など一瞬で灰にするたゞ二
「風律欠界！」
〔クエ・ルオン〕

右手に構えていた魔刀、ギルムを前方に構える。その先端から大気が振動し、そこを中心として風が二分に分かれていく。二分した空気の道に誘導されるように、およそ一千を超える青白い炎が俺の約一・五メートル先で一手に切断されていく。

掠りもしない炎はホレにシリシリと熱をこえてくる

オレはここに機会を見つけ、風の盾を継続して発動させたまま、魔

刀、ギルムに魔力を通し、詠唱と同時に魔力を編み、魔術を構成させていく。

古来より伝えられてきた魔術の詠唱は、今はどの国の言語にも当てはまらない。一般人が聞いても意味が分からなし、意味が無い。魔術師が魔術のためだけに創りだした言葉だ。その言葉自体には全くの意味は無い。魔力を用いて魔術を発動させる過程での、いわば自己催眠のようなものだ。

くなるのだ。

「爆砲利空・滅つ！」

空気が風により霧散する事による一瞬の静寂。その一瞬後に起きた爆音と爆風で体が持つていかれる。がなんとか足を踏ん張り、堪える。

前方。

そこには、抉れた地面と、そいつの四肢っぽい残骸が黒焦げになつて転がっていた。

仕事を終えた安楽感と魔力の消費で、立ちくらみの様なものを覚えるが、頭を振り、四方を確認する。

全くの気配なし。それがオレの戦闘終了の証拠となつた。

「火石竜子は楽だな。いつもこれだけなら疲れないんだけど」

嘆息と同時に出来る欠伸を噛みころして体を伸ばす。

「毎日ザコの相手などしていたら腕が鈍るどころか、退屈すぎて死んでしまうな」

隣から雑音。お前はこのクソくだらない掃除に何を求めるんだ。この戦闘狂が。

「それと捺揮、術の名前を呼びながら発動させるのは、今時どうかと思うぞ。お前がそういう方向性のアニメに嵌つているというのなら、あえて俺は何も言わないが」

「鶯真こそオレに教えてくれ。お前はときどき単細胞か痴呆症なんか微妙だから、お前の主治医が安楽死の方法に困ってるそうだぞ。お前はどの死に方がお好みだ?今ならオレが無料で行つてやる」いつも通りの下らないやり取り。

オレは魔刀ギルムを鞘に収めた。

薄暗い夜を強調するような月。

ここ尾久市は靈脈に優れた土地で、世界各國を詮索してもこの上を

行くのは手の指の数もない程だ。

その靈脈に惹かれて、先ほどのような魔物などが此処にたどり着き、街を徘徊するのだ。その様な異形の者共の相手は一般人などには手に負えるものではない。

故に魔術協会と言つ組織は、管理者として古くからのエリート魔術士の家系を、この土地を治めさせている。

その魔術家の姓が坂魅であり、その次期当主が俺の隣の隣の隣で豪剣を背負い憮然とした表情で歩いている、坂魅鷺真だ。

認めたくはないのだがオレの相棒で、最強に近い魔剣士で無駄なまでの美貌の持ち主だが、その性格と女癖の悪さは人類全てが交流不可能なまでに捻じ曲がっている。

オレは仕事帰りのサラリーマン以上に深く大きいため息を吐きながら、腰にぶら下がつた鞘に目を落とす。

鞘には魔刀ギルムが収納されている。

魔鋼大業物刀。通称「魔刀ギルム」。

白々と月に反射する日本刀のような刀身は、まるで生きているかのような存在感がある。

通常、人間なら誰でも魔力を持っている。魔力と言つても、それはいわば生命力のようなものなのだ。

一般人と魔術師の違いは、その魔力を通す道である魔術回路があるかどうかなのだ。それが、生まれながらにあるか、ないかによって素質が決まる。

しかし、魔術回路があつても出口が無いため、結局のところそれを外に放出し干渉させることは出来ない。

だが、不可能でもない。

宝具と言われる物がそれを可能にする。

魔刀ギルムもその一つだ。

魔術師はそれらに自らの魔術回路を結合、同化させ、自分の代わりにそれを出口にして、術として初めて発動させる事が出来る。

宝具は、剣、槍、弓、銃、宝石と様々にあり、自らの体を宝具と一

体化した奴もいた。宝具は基本的に魔術師の家系に一つか二つぐら
いしかない。それを次の当主である肉親に譲り渡す。
この刀も長年使ってきたせいか、魔術発動のさいのシンクロが最近
うまくいかない。

オレはその刀身を覗き込むように見る。

刀身に少し疲労が目立つ自分の顔が映る。友人に、この顔と俺の言
動が似合わないと言われたが、別に気にする程でもない。

我知らず腹を押えていた。胃が鈍い疼痛を訴えだす。

「胃痛か、下法使い」

「腹が空いただけだよ、心配でもしてくれたのか？」

鶯真が呟く。腹を擦つている所を見られたらしい。

「貴様の首の切斷手術なら、俺がどのような状況でも喜んで行つて
やろつ」

「その前に、お前の脳手術の予約を入れとけよ。異常だらけで手遅
れかもしれないけどな」

冷めた鉄の囁き合い。

これも日常茶飯事。こいつと馴れ合つことができる人類はいない。

何故ならこいつは猿人以下だからだ。

「さつて、腐れ仕事も終わつたし、明日は学校もねえ。久々にゆつ
くりできるな」

鶯真の返事はないが続ける。

「オレは彩^{あや}と恵理香^{えりか}たちと一緒に映画を見に行くが」

「動画なんかに興味は無い」

「別に誘つてねえよ」

鶯真が黙りこくる。オレに優勢。

「それで、お前は明日何するんだ?」

「人間生活」

分かつてはいたが、こんな性根が腐つた奴と会話が成り立つ奴なん
て、この世には絶対存在しないね。もちろん異世界とかにも。
オレはあることに気づいて周りを警戒した。

唐突に鶯真は背に抱えた魔豪剣エルドスを静かに、優雅に抜刀する。

「捺揮」

「分かつてる」

魔剣士なんかに言われる前から、オレはその気配を感じ取っていた。
火石^{サラマンダ}童子を灰にした公園を出た辺りごろから、オレ達はつけられた
いた。いや、正確にはつけさしていたのだが、此處に来てそいつが
行動に移したらしい。

オレは柄に手を掛けようとするが、膨大な殺氣を感じ取り、半ば反
射的に右側に飛び転がる。そのコンマ数秒後に俺の立っていた位置
に疾風の刃が音速以上の速さで駆け抜け抜けていった。その後に続く激
しい金属音。鶯真が魔豪剣エルドスで何かを弾き、返す刃で敵を切
斬しようとする。

鶯真と対峙していたのは人の形をしていた。だが、物理現象にまで
及ぼす膨大な殺氣は、到底人には及びもつかない程だった。

「ちつ」

鶯真が瞬時に後退し相手との距離をとった。オレはその事実に愕然
とした。人類の大半が嫌惡するような性格の持ち主の鶯真だが、そ
の実力は本物で、奴に接近戦だけで有利に立つ奴がいるなど思つて
も見なかつた。

だが驚いている暇は無い。オレは魔刀ギルムを抜刀し、地を蹴り疾
駆する。

同時に鶯真も相手との間合いを詰め、鶯真と左右からの斬撃を同時
に叩き込む。
奴は棒立ちにつつ立つたまま右腕でオレの刀を、左腕で鶯真の剣を
それぞれ受け止めた。

鶯真の超高速、超重量で飛来する剣が奴の左腕を半ばまで切り裂く。
逆に言うとそれだけしか斬れなかつた。鶯真はオレみたいな魔術師
ではなく、主に接近戦を主体とした戦闘スタイルを持つ魔剣士な
だ。

魔剣士は魔術師のように、魔術を構成して世界に干渉することを主

としていない。魔剣士は魔力を外に放出するのではなく、内に魔力を通し身体能力を向上させるのが普通だ。しかし、人の体ではその負担が大きく、その様な理由で魔剣士は魔術師より少ない。だが、鶯真はそれには当てはまらない。幼稚子から魔剣士としての訓練で頑丈に鍛えあがつた体は、人の域を超えてしまっている。加えて鶯真は、魔力を凝縮、瞬間に放出することによつて、動きの一つ一つを加速さしている。魔力の消費が激しいそれは、魔力量が通常より遙かに凌駕している鶯真だからこそできるのだ。その鶯真にかかれ、鋼でできている丸太も切断することができるだろう。

その鶯真の剣を片腕を半ば斬らせただけで止めたのだ。

無論、オレの刀など奴の肉を斬れる訳無く、皮膚を傷つけることもできなかつた。

だがこれで終わりではない。オレは密かに詠唱していた魔術を発動。
オウ・フル
重嵐押岩。凝縮させた大気を爆発的に開放させる事によつて、重質量をもつた空気の塊が奴の体を軽々と、いや、重々しく後退させる。

鶯真は追い討ちをかけるように疾駆し、ギロチンの「ごとく奴に魔豪剣を振り下ろす。奴は両腕でそれを受け止めるが、今度の魔豪剣はそれを斬断させ、奴の左肩に叩き落す。

鶯真は操術の一つである超周波鋼煉を発動させ、魔豪剣エルドスの刃を一秒間に6千にも及ぶ超高速振動させることによつて、その斬断力を倍化させやがつたのだ。

そこでオレは違和感に気づいた。奴の体から血が出ない。

続く刃で、鶯真は奴の首を切り飛ばそうとするが、奴は常識を逸脱した速度で後退した。その瞬間にオレは爆砲利空・滅を奴の顔面に発動させる。風と炎の魔術を合わせた、基本的な爆発魔術だ。その程度では奴に致命傷は与えられないが、動きを一瞬止めるだけで十分だつた。

その一瞬で鶯真は距離を詰め、魔豪剣エルドスで今度こそ奴の首を刎ねた。

奴の頭がゴトリ、と地面に落ち、段々と灰化していった。
気がつけば胴体も跡形も無かつた。

「結局なんだつたんだ？」

それを見下ろしながら相棒に疑問を投げかける。

「さあな、だが明らかに人ではないな」

「そりやそうだ。ただの人間があんな動きをするはずないし、血が出ないのもおかしい」

それ以前に、鶯真の剣を止めるほどの体の造りをしている人間がいたらとんでもない。

「そういうえばお前、さつきの奴相手に後退してたみたいだけど、足でも滑つたか？」

この程度の敵に鶯真が遅れをとるとは思えない。オレは皮肉に言つようには疑問を投げかける。

「馬鹿な寝言は永眠してから言つんだな。これを見てみろ」

鶯真は魔豪剣エルドスでそこを指す。俺は目を凝らしてみてみた。そこにはアスファルトが半径2メートルぐらいにかけて沈没していった。

「先ほどの敵が使つたのは高位魔術の一つだ。おそらくは重力操作の類であろうな、あと少し後退が遅れていれば、さすがの俺でも腕の一本はもつていかれた」

淡々と鶯真は続ける。

「奴はそれ程の高位の術を使つたにもかかわらず、魔術詠唱どころか宝具らしきものも身に着けていなかつた。これらから推測されるのは一つだ」

「・・・・・魔人か」

オレはきつと嫌な顔をしていただろう。

魔人、- - - - - 世界のどこかには五箇所だけ、魔界とやらに通じるゲートと言つものがあるらしい。宝具の大半は人が作った人工物ではなく、そこから流れ出てきたものらしい。そして、そのゲートを監視し、封印を維持する組織が神教会と言わされてい

る。昔、魔術協会の一部が更なる魔術向上を理由に、ゲートの封印を解こうとして、新教会と戦争になつた過去がある。そんな事があつたことで、現在進行形で魔術協会と新教会は断崖絶壁の壁のごとく壊滅的に仲が悪い。魔術協会に所属していないオレには関係の無い話だ。話を最初に戻すが。一時期だけゲートの封印が解かれ魔界とこちらの世界が繋がつてしまつたことがあつたらしい。その時にあちらからこちらの世界に来たのが、憑依性の強い実体を持たない悪魔だ。そいつ等は人にとり憑き自我を奪う。そうして生まれるのが特殊能力を持つた人間だ。奴らのことを魔人と呼ぶ。先ほどの戦闘で鷦魔の剣を受け止めることができたのは、その能力によつて質量密度を上昇させ、肉体強化を行つたからだろう。

俺達は会話を続けながら歩き出す。

「それにも何で魔人がこんなところに出てくるんだ？」

「情報の少ない事を議論しても始まらない。明日、じきむね穢宗に情報提供を要求したらどうだ。もしかしたら何か知つてているかもしけんぞ」「げ、あのエセ神父にか？」

俺は奴の顔を思い出して、思いつきり顔をしかめる。

「思い出したが、穢宗がまたお前に服を送つてきたぞ。どうして俺宛に届くのか不思議と不快で堪らない。さつさとあの服を着て穢宗の前に姿を現して奴を満足させてやれ」

「あんなフリフリの付いている服はオレの好みじゃねえ。絶対、着んつ！」

それ以前にあの服を着ると何か裏がありそうで恐い。

「そういえばオレも思い出したが、女遊びは程々にしろ。お前が捨てた女がキーキー言いながらオレに詰め寄つてくるのはいい加減、堪忍袋の尾が真つ二つに引きちぎれそうなんだよ」

「なんだ、自分に男ができるから俺に八つ当たりしているのか？」

「といえばお前は校内新聞で「彼女にしたくないアイドルナンバー1」に選ばれていたではないか。おめでとう」

「チツとオレの頭の中で何かが切れる音がした。

「てめえ言いやがつたなっ！！普段はクールを氣取つてるけど、実は中学一年生まで母親と風呂入つてたくせにっ！！」

「き、貴様どこでそれを！！貴様こそ昔飼つていた金魚に初恋の男の名前をつけて、毎日毎日、金魚に向かつてその名前を呼んでいたそうではないかっ！！」

「なつ、何でお前がその事を知つてんだよー」のマザコンつ
「黙れ男女。珍獣であるお前の鳴き声は俺の耳が痛くなる要因だ。さつさと消えることを切に祈つている」

「オレの半径50メートル範囲にいる魔剣士に伝えといってくれ。お前が呼吸する度に地球温暖化が倍の速度で進行するから、人類全とのために超音速で死んでくださいとね」

沈黙。俺達はお互いを睨みつけたまま無言。先に均衡を破つたのは鶯真の方だつた。

「やはり、貴様の性格は根元からボロボロだな

「性根が溶けて、跡かたも無くなつていてお前が言つな

俺達は罵倒を言い合いながら歩いていると、十字路にたどり着いた。此処はオレと鶯真の分かれ道でもあつた。

こいつと一緒にいると秒単位でストレスが溜まつていくオレにとっては、此処からは安息の道になるわけだ。

「じゃあな。さつさと帰つてママの膝枕で寝かしてもらえ

「貴様の方こそ。明日、調子に乗つて化粧なんてするな。どうせ化け物になるだけだからな」
別れ際まで厭味の押収をする俺達は、ある意味特別な関係だらう。少々キモイ響きだが。

「俺は貴様が嫌いだ

「素晴らしい気が合うな。オレもお前が大嫌いだ

厭味には厭味を返すのがオレのモットー。つーか嫌い以前に死んでくれねーかなー。マジで。

「ふん。ではな、星と剣の祝福を

鶯真はどつかの種族の別れの言葉を投げ捨てて、オレの返事など待

たずには踵を返してそのまま歩き出す。

オレは嘆息し、長く重い空気を吐いた。

そのうち、どうせまた奴と組んで魔物や魔人との壮絶な殺し合いをすることになるだろ？。

休暇の田ぐらには、せめてそのことを忘れて、楽しい一時を過ごそう。

オレは夜の風を受けながら、まっすぐに家に帰った。

そこは火の海だった。自分の家だけではなく、その隣の家もその隣もその隣も、延々に続く炎々だった。オレはその地獄の中をただ歩いていいだけだった。目に映る死体など無視して、耳に響く助けを呼ぶ声など聞こえないフリをして、何も考えずに歩いていただけだった。周りから迫りくる炎と、それに巻われた人だったモノを見て、自分も此処で死ぬのだと、客観的に考えていた。どれだけ歩いても周りは赤一色だった。我知らずに脚が止まり、オレは膝から体を崩していった。オレは仰向けに倒れ、灰色に染まっている空を見上げていた。ポツリ、と一滴のしづくが目の下の頬に落ちてきた。それを合図とするように、ザーザーと一緒に大粒の雨が降り出す。後一時間。いや、三十分雨が降るのが早ければ、いつたいどれ位の人たちが助かつていたのだろう。そんなことは分からぬ。雨は今になつて降り出してきたのだから。オレの意識が朦朧としだしてきた。体力の限界はとつこの昔に過ぎていたのだ。風前の灯だった。もう

死ぬんだなと諦めかけた時だった。ピチヤピチヤ、と雨に濡れた地面を踏みしめる音が聞こえる。オレは重い瞼を必死に開けて見た。オレの真上で、青年のような男性がオレを見下ろしていた。その顔はまるで、オレが生きていたことを喜んでいるようだった。男は雨に濡れていたからはつきりとは言えないが、オレにはその男が泣いているように見えた。そこで、オレの意識が暗転した。

いきなりだが、オレは男が大嫌いだ。絶滅しろつてくらいの嫌悪感がある。そんな考えを持つてしまう。99・8パーセントの要因は、鶯真やエセ神父の存在のせいだろう。

男共全員が奴らと同じ種類に分けられると思つて、思わず誰でもいいから男をぶん殴りたい衝動に駆られる。

男全般は嫌いだが、それでも一応は好みといつか理想がある。

包容力と言うものがある男がいいのだ。今時の男にそんなもの求めるのもどうかと思つが、親父がそうだつたから憧れているのかもしれない。

まあ、理想云々の前にオレはこの言動のせいで、はつきり言つて持てない。というか恐れられている。というか、なんか引かれてる。という訳で、学校内ではもうオレに軽々しく声をかけてくる奴は皆無になつた。

だがしかし、こつして女服を着て街に出ると必ず声をかけてくる奴らがいる。

その内の十中八九は、そんな暇があるんなら勉強しろよつて思わず

言いたくなりそうな、いかにも頭が悪いだろうと思つキャララキャラ
としたナンパ男だ。

「ねえ、君一人？」

残りの0・2パーセントはそいつ等のせいだろう。オレは人を見かけで判断する奴が嫌いだからだ。

「もし暇だつたら僕とお茶しない？君可愛いし」

だからオレは完全無視を決め込んでいる。いちいち返答なんてするのも面倒だ。

「もしもーし。聞いてる？」

大抵の男はちょっと無視したら、あつさり諦めるのだが。こいつは自分に自信があるのか、かなりしつこい。

「あのせ、君の事なんだけど、もしかして無視」

しかし、いくら無視していてもオレにも限界というか、堪忍袋の尾と言う物がある。しかも、日々鶯真やエセ神父のおかげで物凄く切れやすくなっているため、今現在でのオレの許容範囲はかなり狭いのだ。

「おいつ、無視かつて聞いてんだよつ……」
で、いきなりそいつがオレの肩を掴んできた。
限界と言つ名のリミットをオーバーしました。
ていうか、我慢の限界じゃボケーつ……

大体。「無視ですか？」つて聞かれて「はい。無視です」なんて答えるのは、修学旅行の就寝時間とかで先生に「もう寝ましたか？」つて聞かれて、律儀にも「はい。寝ました」と答えて寝ていないことがばれてしまつて、廊下に正座させられるのと全くの同義なんだよつ！。

オレは今と昔の怒りを視線に乗せてそいつを睨みつける。

「うつ・・・・・！」

オレの怒氣を感じ取つたのか、オレにナンパしてきたキャララ男は戦慄し、後ずさる。

「今オレは物凄く腹が立つてゐる。分かるな？お前の存在を抹消さ

れたくなかつたら3秒以内に消える。むしろ死ね、不愉快だつ
そいつはようやくなにを言われているのが分かつたのか、超情け
ない鼠の様に人混みの中に消えていった。

たく、くだらねえ。オレはチャラ男も嫌いだし情けない男も嫌いだ。
やつぱ男共は絶滅してしまえ。

「捺揮ちゃん！」

オレが男殲滅計画を思案していると、聞きなれた友人の声が真後ろ
から聞こえてきた。

オレはゆつくりと振り返り、一瞥する。

「遅いっ！ いつたい何時だと思ってるんだ」

「ちゃんと時間通りじゃん。捺揮が早すぎるんだよ」

オレに言つてきたのは、校内新聞で「彼女にしたいアイドルナンバー3」に輝いていた、三津浦彩みつうらあやだ。身長はオレより少し高いくらいのロングヘヤーの美女だ。出るとこりは出て、締まるところは締まつていて完璧なプロポーションは美女と言つに相応しい。

「捺揮ちゃん。何時に此処來たの？」

と、オレの聞いてきたのは、同じく校内新聞で

「妹になつて欲しいアイドルナンバー1」に選ばれていた月島恵理香つきしまえだ。ショートが似合う美少年のような小柄な少女は、持ち前の可愛らしい笑顔で妹属性の男を常日頃から誘惑している強者だ。

「約二十分前」

「知つてる」

「・・・・・・・・」

「実はさ、私たち捺揮が來る前に到着してて、影から捺揮の様子を
見てたんだ」

「捺揮ちゃんが、どれくらいナンパされるか賭けてたんだよねー」

「・・・・・・・・」

「恵理香それ言つちや駄目だつて」

「結果から言つと、何と十五分間で六回だよ。新記録だね」

「・・・・・・・・お前ら。オレをだにして賭け事してたのか

？」

「「うん」」

「奢れ」

そんなやり取りを続けた後、オレ達は田舎地に向かい、歩き出した。空はきれいな青色をしていた。

一瞬の一時だけでも、オレは彼女達のによつて激務を忘れることができる。

そういうえば、オレの自己紹介をしておこう。

オレの名前は、柊捺揮。

身長164センチメートル、体重はノーロメント。髪は肩に垂れる位の長さだ。

この言葉遣いでよく誤解されるが、一応女だ。

十一年前、親父に死にかけだつたオレは助けられ、養子になつてから柊の姓を貰つた。

親父は魔術師であり、その事実を知つたオレは親父に魔術を教えてくれと強請つた。

はじめは渋つていた親父だつたが、オレに素質が在つたこと、持ち前の諦めの悪さで何とか基礎知識だけは教えてもらつた。

それから親父は五年後に死んでしまつたが、オレは独学で魔術の構成式を学んだ。

鷺真と出会つたのは四年前ぐらいだつたかな。親父はフリーの魔術師で魔術協会にすら所属していなかつたが、尾久市を管理している坂魅家とは昔からの交流があつたそうだ。親父が死んでしまい、孤立した魔術師となつてしまつたオレに、坂魅の現当主が協力関係を結ばないかと言つてきた。内容はシンプルだつた。オレに次期当主と最近多くなつてきた魔物などの「異形のものども」の始末をしてくれと言つものだつた。正直に言つとはじめは喜んだね。自分が今まで培つてきた魔術が有効に使役できるからだ。しかし、実際は最悪だつた。その最もの原因是鷺真つて名前の、道徳的に無駄だらけの脳みそに穴が開いた腐れ魔剣士だつた。

れて、奴のことを思って出したら無性に腹が立つてきた。 いりいり込んで
思考を中断しよう。

「捺揮ちやーん。 早くー」

「遅いよ。捺揮」

おや、いつの間にか遅れていたみたいだ。

オレは地を蹴り、脚で地面をかみ締め走り出した。

今オレは天国に居るね。

口いっぱいに広がるとろける様な甘味が、オレの味覚を刺激する。ふわりとした食感がなんとも堪らない。

これを幸せと言わず何という。甘党万歳。

「そうしてると、捺揮ちゃんって女の子だなつ、て思うよ」

恵理香がオレの顔をまじまじと見ながら言う。

オレは口の中のブルーベリータルトを飲み込んで、口を開く。

「今更なに言つてんだ。オレは元々女だ」

頬が緩んでいたらしい。

「確かにそうだけど、捺揮のその言葉遣いが駄目なんだつて」

彩が指摘する。そんなことオレだつて分かってるよ。

「仕方ないだろ。通つてた学校は小も中もほぼ男子校みたいなもんだつたんだから。自然にこんな口調になつてたんだよ」

近所には年頃の同姓も居なかつたので、学校だけが唯一の交流の場だつた。そのせいか、高校に入るまでは女友達なんて一人もいなかつたし、親父もオレの口調に関しては何も言わなかつたので、別に気にしてはいなかつたのだ。

まあ、今も気になんてしてないが。

「気になったほうが良いと私は思うよ。素材は良いんだから、それさえ直せば男なんてより取り見取りなのに」

「オレは男が嫌いだから別に良いんだよ」

大体ちよつと口調を変えたぐらいで、寄つてくる男なんてどうせ大したモンじやないだろつ。

「でも捺揮ちゃんは頭も良いし、運動能力も抜群だし、美人だがら結構持てるんだよ」

「嘘付け。校内でオレに話しかけてくる男なんて皆無に等しいぞ」

「だつて捺揮ちゃん、「近寄つてくるなオーラ」みたいな物だして

るんだもん

だってうぜえだろ。男なんて。

とか思っていると、
恵理香は満面の笑みを浮かべた。

・ エンドウのアヒルの話レシスンを吸収する? -

「心の聲だ。いらん

「またまた、遠慮しないで

「口の動きを良く見ら、い、ら、ん」

オレの明確な拒絶を、恵理香は笑って右から左に受け流す。

「それに私たちのクラスって、たしか文化祭でコスプレ喫茶やるで

彩と恵理香がオレを説得しようとある。

「・・・・・とか言いつつオレで遊びたいだけだろ」

四〇七

彩が演技が掛かつたように頭を横に振る。

ただ捺撃のためを思ひてだよ

お、が、絆參のジヒヌチャニ、ナカムバ、懸野物ナキ、リ講門、アリスカ、モ、アキ。

だ。

「じゃあまずは、オレではなく私と云ひてみ放しゅうか」

たわし?

いかんいかんと思わず搾縦反応が出てしまった

「うーん、うーん。」

「結構結構。じゃあ次は・・・・・

青年が、微笑を浮かべたまま好奇心を出しながら歩いていた。

「きよ…………エイド殿。先に行かれては困ります」

性がいた。

「おやおや、どうも悪せん。田舎には如めてうがひで、少し浮かれていました」

青年は振り返り慌てる彼女を見て、まだ微笑を浮かべて答える。
「エイド殿。少しほは慎重に行動なさつてください。何があるか解りませんので」

日本は比較的平和な国と聞いていたが、彼女は額に小さいしわを寄せる。

「万が一という事もあります。御身に何かあると一大事です」

青年はやれやれといふ風は肩をぐぐぐ

青年は琥珀色の瞳を細くしながら続ける。

「それに、今の僕は執行人だよ。君は隠密行動と情報戦には向いて

青年は女性を叱咤している様だったが、その口調は彼が気分を害している感じではなかつた。

「 も、申し訳ござりません」

それでも彼女は必死に頭を下げていた。その様子を見て、青年は彼

女に聞こえないように小さなため息をついた。

（やつぱり、ギリー君にしたほうが良かったのかな？）

青年は二十代後半の男性の姿を思い浮かべる。でも彼も何処となく硬つ苦しいので、やはり彼女を選んだのは最適だつたといえよう。

「そういえばフィネス君。君の商売道具はどうしたのかな？」

彼女がいつも隠して携帯しているそれを、現在は所持していなかつたので疑問を投げかける。

「それでしたら一般の航空機では持ち込めないので、密輸してその地域の神父に預けています」

そうか、と青年は頷いた。

そのまま彼らは歩き出し、無数の人人が入れ替わり続けるそこを後にする。

**

今のオレはオレであつてオレじゃなくて、今喋つてるのはオレの偽者とかで、本物のオレはきっとスリランカとかで本物の夕日などを見ているはずだ。

オレの目の前には頬を引きつって笑いに絶えている一人が居る。

そこにオレは爆弾を投げかける。

「どうして二人とも笑つてるにや。私、何か可笑しい事言つてるかにや？」

それが決め手となつたのか、一人は堰を切つたよように笑つ。嗤つ。晒う。

もう我慢の限界。

「ていうかにゃ、どう考へても方向性が違つてんじゃにゃいか————つ——！」

オレは一人の柔らかい頬を摘み上げ捻り潰す。

「ひたいひたいよ、なふひひやーん」

「あたたたたごめんごめんて、捺揮がすつかり騙されちゃつたから、つい面白い」

まだ嗤つてやがる。このまま頬を引き千切つたろか。

「お前らを信じたオレが馬鹿だつたよ」

「まだに頬を引きつらせて嗤つことを我慢している一人に、不機嫌にオレは言つてやる。

「でもさつきの捺揮ちゃん、すぐ可愛かつたよ」

「うんうん。思わず抱き着きたくなつちやう程だつたね」

「てめえら笑つてただけじゃないか」

オレはそっぽ向き、ガラス張りの窓の向こうに視線を向ける。ちょうど、パトカーの高速で複数台に渡つて、通り過ぎていくといふだつた。

何か大きな事件でも起きたのだろうか。

「最近多いよね」

ポツリと、彩が独り言のように呟いた。オレは彩に視線を戻す。

「多いいつて、最近なんか事件でも多発してんのか？」

「捺揮ちゃん知らないの？ 最近、通り魔とか一家虐殺事件とかが隣町で多発してゐみたいなの」

淡々と、まるでその事件と関つてゐるよくな口調で恵理香が続ける。

「しかもその殺人に使つた凶器は、鈍器の様な物での撲殺つて事になつてゐるけど、検査結果だとまるで人が素手で殴つたような形をしていたらしいの。通り魔事件のほつも、みんな頭を何かの力で潰されてるみたいなんだつて」

一般的と常識的に考えて、人が素手で一家惨殺なんて到底不可能だろ。いや、鶯真なら出来そうな気もするが、アレはもう人間じゃないので無視して構わないだろ。それと、通り魔の方。昨日現れた魔人。それらが隣町のほうで無差別に人を襲っているというのなら合点がいく。だがそれでは、オレが今までその事件を知らなかつた事はどう説明できるだろ。もし魔人による事件が多発しているというのなら、エセ神父の方から何かの要請があるはずだ。あいつが今までそれを放置していると言うのであれば納得がいかない。アレはアレでアレだけど一応は神父で仕事をこなしている様な気がするのだ。ただの勘だが。

オレが思考を巡らしていると、彩が「次は何処に行く?」と話題を変えてきた。

憶測だけの考えなど纏る筈も無く、オレはその流れに乗ることにした。

「服とか見ていいよ。特に捺揮ちゃんはもうひとつ色気が出るような服を着なくちゃ」

すっかり切り替わった恵理香は、オレに服を勧めてくる。正直に言うと、そういう物にも興味がないと言えば嘘になるが、それによつて動きが制限されるのは気に入らん。

すると唐突に、オレの鞄から異様なサイレンのような着信音が響く。オレはそれを、何も聞こえないフリをして無視する。

「捺揮。何か鳴つてるっぽいんだけど?」

「無視しろ。それに出ると、オレは今から地獄の住人が起こした災厄に一々出向かわなくてはならなくなる予感が猛烈にする」しかし、携帯電話は一向に鳴り止まないので、オレは最大限の嫌悪を持って電話の電源を切つた。

これでオレの平和は間違ひ無し。あー幸せだこんな日がいつまでも続けばいいのに。

ケーキも食べ終わったので、オレ達は席を立つことにした。すると今度は彩の方から、携帯電話の着信音が鳴り出した。

彩が「いつたい誰だろ？」と怪訝な顔をして、電話に出た。俺は腹部と胸部が緊張するほどに嫌な予感を覚えた。

無言が続き、彩がチラチラと俺に視線を送る。そして、物凄く意味不可解な顔をしてオレに電話を差し出してきた。

「いつたい何処のアホからだ？」

オレは携帯電話を受け取りながら、彩に問いただす。

彩は無言で哀れむような視線を俺に向けてきた。

オレは携帯電話の先を耳に近づける。

「誰だ？」

「貴様こそ、誰がアホだと？」

物理世界一のアホからの声だった。

**

揺れるたびに背中に当たる魔刀ギルムは竹刀袋に入れて背に抱え、運動靴から履き替えた、周りには識別できないようなデザインの戦闘靴で、地面を苛々しく蹴りつける。

ある程度の距離を歩くと、隣町とを繋ぐ大橋の前でそいつは悠然と立っていた。

生ける彫像のような腹立だしい程の美形の横に、二人の女が寄り添うように立っていた。

一人は二十代前半ぐらいの眼鏡をかけたすらりとしたスタイルの美女だ。もう一方は、少し痩せ気味の自分と同年代ぐらいの美少女だった。どちらもオレの知らない人間だった。

そして一人ともが、鶯真の横顔に魂を奪われたかのように陶然と見惚れ、鶯真の声にいちいち頷いていた。

鶯真の近くに女たちが群れているのはいつもの事だ。

「今から仕事だ。お前達は何処かに行つてろ」

女達はオレから見ても哀れなくらいに、脱兎の「」とく先を争つよう¹に去つていつた。まるで暴君の忠犬だな。

「お前いつたいどんだけ女がいるんだ?」

俺は彼女たちが去つた方角を見ながら疑問を投げかける。

「さあな、女の方から勝手に寄つてくるので、途中で数えるのを止めた」

「お前、ホントに女の敵だな。いつか刺されろ」

俺の言葉に鶯真は鼻で笑う。

「その時は、別の女が身を挺して守つてくれるだろ?」

全世界の女代表として、オレは想像の中で鶯真を刺しておぐ。もちろん、かなり遠くから。

「無駄話はここまでだ。早く行くぞ」

鶯真は身を翻し、橋の向こうに歩き出す。

オレは苛々しく後を追う。

「穢宗からの召集だつたのだが、貴様が一向に電話に出ないのでな、仕方が無いので貴様の知人に掛けて見たところ見事当りだつたのだ。なぜ怒つている?」

「天国のお花畠で遊んでいるが如く、幸せ満喫中だつたにも拘らず、いきなり地獄に落とされ閻魔のような奴に会い、果てには働けと言われて不機嫌にならない奴がいるのか」

オレは鶯真を睨みつけたまま言つ。

「そして一番の問題は、なぜ、お前が、彩の電話番号を知つてゐるんだよ」

鶯真はその内面に綺麗に反比例しているような、無駄なまでの神々しいほどの美形である。

彩はオレの大切な友人だ。まさかとは思つが、彩がこいつの毒牙に

掛かっているのなら、・・・・・殺す。

いや、正面からは無理っぽいので、夜道に背後から超高位大魔術で正義と道徳がたくさん詰まつた、オレの裁きの鉄槌といつ名の暗殺を執行する。

「少し調べてみたいことがあつたのでな、校内の図書室を行つたところ貴様の知人がいたのでな。それだけだ」

「いや、何でそこから番号を聞くまでに発展するんだよ」

「女性に番号を聞くのは礼儀として普通であろうが」

「お前の礼儀は普通の一般人が考えている礼儀と、大きくかけ離れていることに、いい加減気づけ」

今度彩に会つたら、携帯の番号を変えるように説得しよう。いやマジで。

「お前、それほどまでに女癖が悪かつたら何時か母親がストレスで病死するぞ。『昔は無邪氣でいい子だったのに』とか言つてや」

鶯真は返事を返さない。どうやら思い当たる節があるようだ。さまあ見ろ、けけれ。

「お前が母親に見捨てられるのは時間の問題だな」

「そんなことは無い。母上は俺を愛している」

「お前、一言日本には母上だな。そういうやおまえ、前に女嫌いだつて言つてたけど、自分の中での女は母だけだつて意味か？」

鶯真が黙りこくる。げげ、もしかするともしかしなくても図星つ！

「あの～鶯真さん、日本では近親相姦と言つ素晴らしい四字熟語があるのですが」

「冗談だ。俺は母上に真実の愛を捧げているだけだ。それに、これでも許婚がいる」

そうか、と冗談かと残念がるより、鶯真の許婚がいると言つ言葉に、しばし理解が遅れた。

こんな人間的に破滅した、社会に不要どころか害を与える糞以下人間の妻になるなんて、きっと宇宙的に広い器の持ち主なのだろう。一回で良いから顔を揉んでみたい。

「ついでに言うと、そいつは俺と許婚と言つ関係である」とを知らない

あ～あ終わったねその女の人生。鶯真の妻となつたあかつきには、鶯真の言動や行動を理解できずに「あの人はいつたい何なのだ？」と悩んだ挙句、ストレスが蔓延し、白髪や皺などが増え続け、果てには精神科の病院に通院または入院する末路が、オレには見えてきた。

「許婚つて美人なのか。ていうかオレの知つてる奴？」

「性格はかなり難ありだが、美人といえば美人、なのか？」

「何で疑問系なんだよ。オレが知るか」

軽口と軽口を重ねながら、いつの間にか目的地にたどり着く。隣町の丘の上に淒然と、周りには建物一つ無い場所でそれは建っていた。

オレと鶯真にとつて愉快な思い出など何一つ無い教会。

そこだけは今まで通つていた騒がしい雰囲気などは無く。静寂と不気味さを蔓延させていた。

オレはいつも此処に来ると吐き気を覚える。

鶯真は何も感じないらしく、歩調を緩めることなく、床石を蹴り歩く。

オレは嫌々ながらも鶯真に付いていく形で教会に向かつて歩を進める。

ふと、何かの視線を感じて足を止め、周りを見渡した。小鳥のさえずりが聞こえるだけで別段変わった様子は何も無かつた。気のせいか。

思い直して、オレは教会の中に入った。

教会の中に入ると、これまた異様な雰囲気が漂つている。

ただオレがそう思つてるだけなのだが。

前方の教壇の前に、鶯真と同じくらいの身長の中肉中背の眼鏡男が立つていた。

ここに教会の神父であり、かつ、自称親父のライバルと言つていたエセ神父である。

そいつが徐に言葉を紡ぎ出す。

「よく来た鶯真、それに捺揮。四集からかなり時間が経つてゐるようと思つが、今は不問にしよつ」

落ち着いた感じで低い声を出す、齡三十代後半の男。穢宗。まるで時代劇とかに出てきそうな名前だなとつくづく思う。

こいつは新教会所属の神父でありながら、魔術協会にも籍を置いている曲者なのだ。オレには鶯真と並ぶただのアホにしか見えない。「ところで捺揮。私が送つた新しい服は気に入つてくれたかな?」「あんな服を着たらオレはきっと発狂死する

オレは亞高速で答えてやる。

オレの返事にエセ神父は自らの顎に手をやり、フム、と呴いて何かを考え込む。

そして教壇の下から何かを引っ張り出してきた。

「君がそういうと思ってな、少し趣向を変えてみた。今までのは私の趣味が半分入つていたからな、これなら君に似合つだらう」

とか言いながら、オレに引っ張り出した来た服を掲げる。

確かに今までのフリフリガ付いた、いわゆるゴシックローラーのような下手物ではなく、近代的かつ流行的な服といえよう。

オレはその服を受け取る。

「ほう、やはり君も気に入つてくれたか。それはなによ」「びりりりりりりり」「りだ?」

そして破ぐ。それはもう徹底的に上から下まで真つ一つに。

ていうか。

「こんなもんをオレに着ろと？てめえオレに羞恥死ねって言つてんのか？」

「ははは、私の月収の五分の一が飛ぶほどのブランド品だったのが」

「そんな金あつたらユーロセフ募金でもしてろ」

前々から思つてたが何でこんな奴が神父なんてやつてんだ。おかしいだらどう考えても。

オレが世界の不条理とか考えていると、横から鶯真が不機嫌さを隠そうともせずに、どすが聞いた声を出す。

「茶番はそこまでにしろ貴様ら。穂宗、用が無いと言つのならオレは帰るぞ」

穂宗が鶯真に視線を移す。

「すまない。ではそろそろ本題に入ろう。最近この街で猟奇的殺人が続いていることは知つているな」

オレは頷く。知つたのは物凄くついつきなのだが、前から知つていたように振舞うのは別に罰じやないと思つ。

鶯真の方は至極当然だ、と言いたげな顔をしている。なんか悔しい。「頭の回転が速い君達なら薄々感づいているとは思つが、それらの犯人は」

エセ神父が一間を空けて言つ。

「魔人だ」

剣と術が交じる時 2（後書き）

次話公開は1または2週間後になります。
初めて真面目に創った作品なので設定とか曖昧です。なので何か質
問があれば、評価と共に送ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7262c/>

マジシャンズ・ブレイド

2010年10月9日00時22分発行